

# ミレーユ・アダス＝ルベル著／東丸恭子訳『フラウィウス・ヨセフス伝』

白水社、1993、274頁、3200円

小堀馨子

フラウィウス・ヨセフスとは誰か。日本においては彼の名を知る人は未だ多くはないだろう。彼はユダヤ名をヨセフ・ベン・マッティア、即ちマッティアの子ヨセフという。ではなぜ彼の名前は通称フラウィウス・ヨセフスとラテン読みされるのだろうか。この名前の変化という事実自体が、彼の運命を象徴している。本書はこの数奇な運命をたどった一人のユダヤ人の生涯を、同時代の社会状況と併せて、更には後世の受容と理解の変遷も加えて述べた伝記である。まず我々は本書「フラウィウス・ヨセフス伝」の章立てに沿って彼の生涯を追うことにしたい。

\* \* \*

全十章の内の初めの二章ではヨセフスの生い立ち、青年期の思想的遍歴が述べられている。エルサレムの王家の血筋を引く祭司の家系に生まれたヨセフスは、ユダヤ教の中のパリサイ派、サドカイ派、エッセネ派という三つの宗派を自由に渡り歩いて体験した後、青年期の三年間、荒野で隠者バヌスに従って生活し、教を乞うが、最終的にパリサイ派を選び取った。また彼は『ユダヤ古代誌』の中で民族主義的過激派とも言うべき熱心党 (zelotes) 或いはテロリスト集団であった sicalii が奉じていた宗派のことを「第四の哲学」と記している。なお、ヨセフスは現代我々が普通「宗教」と称するユダヤ教の宗派をもその著作において「哲学 (philosophia)」と呼んでいる。これは古代世界の宗教観を考える上で非常に興味深いことであると私は思うが、その点は本書では特に取り上げられていない。

第三章では、A.D. 64年にローマに送致された仲間の祭司の解放を要請する使者としてヨセフスがローマに赴き、皇妃ポッパエアの力添えで使命を果たしたこと及びローマのユダヤ人の状況が述べられる。著者の述べる所によればはこの旅を通してヨセフスはローマ帝国の底力を知り、ローマを敵にすることの恐ろしさを如実に感得する契機となった。この第三章で興味深いのは、当時の地中海世界の言語状況が詳しく述べられていることである。著者によれば、ローマが紀元前二世紀頃から次第にその支配下に組み込んでゆく当時のオリエント社会は、既に深くヘレニズム化されており、ローマ世界の公用語はギリシャ語であった。周囲のヘレニズム世界がこのような状況であったにも拘わらず、ユダヤにおいては子弟に対するギリシャ語教育は盛んではなかった。なぜならば、ギリシャ語を学ぶ

際にテキストとして用いられるのはホメロス等の異教の文学作品しかなく、そこには律法中心の生活をするユダヤ人にとって異教の文化・思想の解釈という厄介な問題が生じたからである。それゆえ子弟が異教の文化に対して確たる認識をもつようになって初めてギリシャ語の習得が許されたことが『タルムード』からも窺える。ヨセフ自身もギリシャ語を習得したのは成人後のことらしく、後年ギリシャ語で著作する際に助手を必要としたと著者は記している。

第四章は、65年にローマからエルサレムに戻ったヨセフスが、叛乱勃発後、説得されて全ガリラヤとガウラニティス（ゴラン地方）の指揮官に任命され、着任してからの後、その冷静もしくは曖昧な態度のゆえに反撓を買ったことを述べている。当時のエルサレムには既に対ローマ開戦機運がみなぎっており、ヨセフスの反戦論も受け入れられず、66年の八月若い祭司達を首謀者とする叛徒が民衆を味方につけて戦闘を開始し、善戦して勝利を収め、鎮圧に乗り出したシリア総督までも敗走させた。ヨセフスの見によれば、この緒戦の勝利が戦争を三年以上にもわたって長引かせる一因となった。彼はこの時期は、運命とは即ち神の意志のことであり、人智の及ばない「神の摂理」が働いていたと省察している。この「神の摂理」という言葉に著者は余り関心を払っていないが、私はこの言葉には些かの問題が含まれていると思うので後述する。ガリラヤの指揮官に任命されて後のヨセフスの行動に関しては、政治的意図をもって著された『ユダヤ戦記』とそれより二十年後に書かれた自己弁護的要素の強い『自伝』の記述との間にかかなりの矛盾があると言われており、この矛盾は後世の学者達に様々なレベルでヨセフスの記述の信憑性を疑わせる格好の材料となって未だに論争が絶えないと著者は述べている。

第五章では、67年春のローマの将軍ウェスパシアヌスのユダヤ到着、ヨタバタの要塞攻囲の経緯及び要塞陥落とヨセフスの投降、ウェスパシアヌスの皇帝即位予言がヨセフスの著作に沿って述べられている。この章において特筆すべきは、私見によれば、本書の一般読者向きの性格にもかかわらず、近年のヨセフス研究の成果を取り入れて、著者がヨセフスをエレミヤになぞらえ、ポリュビオスに重ね合わせていることである。近年のヨセフス研究においては、ヨセフスが自らのことを記すとき、彼は自分自身を、バビロンの王ネブカドネザルがエルサレムを攻囲した際、早くから降伏を説いたにも拘わらず、全く聞き入れられることのなかった預言者エレミヤに重ね合わせていたこと、そして紀元前171～168年の第三次マケドニア戦争の際ローマに連行され、戦争後もその地に留まったギリシャ人歴史家ポリュビオスの運命を自分の身上に思い描いていたことが指摘されてきたからである。

第六章では、ヨセフスが捕虜としてローマに送られることなく、ウェスパシアヌスとその息子ティトゥスによるガリラヤ征圧行軍に従ったこと及びエルサレムの内紛について述

べられている。この時期のエルサレムでは、今まで指導権を握っていた穏健な祭司階級の指導者が過激派によって虐殺され、貴族の殺害が続いていた。著者は、67年から68年にかけてのエルサレムの状況をフランス革命の恐怖政治の下にあったパリになぞらえた歴史家 F. Saulcy の言葉を引用して説明する。一方ローマでは68年春、叛乱が各地で起こってネロが自殺し、三皇帝時代が始まるが、彼らの治世は各々三カ月から六カ月しか持たず、結局ウェスパシアヌスがユダヤをはじめとする各地の軍団の兵士の支持を受けて帝位に就く。ヨセフスは新皇帝の即位を予言した者として釈放され、丁重に扱われる。ティトゥスはローマに入城する父と別れ、再びエルサレム攻略に赴くのだが、その際にヨセフスを伴ってゆく。

第七章はエルサレム攻略及び陥落の経緯、即ちローマ軍に包囲され、三派の過激派の内部抗争で食料も失ったエルサレムが、長い飢餓と戦闘の果てに陥落し、ローマ軍による略奪と虐殺にさらされた凄惨な状況が述べられるが、これは再説を避ける。著者は、ヨセフスと過激派、親ローマ派と反ローマ派の対立を、政治家と神秘主義者の対決に譬えている。また、常識では考えられないような抵抗がエルサレムにおいて展開された事態の背景には当時のユダヤ教の終末論が色濃く影を落としていたことを考えなければならないと著者は言う。ヨセフスがエルサレムからは既に神のシェキナー（内在的な光）が離れてしまい、神はもうユダヤ人と共にはないと考えたのに対し、一方、城壁内の過激派は地上のエルサレムではなく終末論的文脈における天上のエルサレムに思いを馳せ、神は自分達の同盟者であると最後まで堅く信じて、驚くべき精神力を示したのだった。

第八章は、三十三歳にして祖国と永訣したヨセフスのローマにおける生活を、僅かな資料から再現しようと試みている。戦争は73年のマサダ陥落で終結する。ヨセフスはローマ市民権を与えられるが、ヨセフスがローマでまず直面したのは反ユダヤ主義であった。諷刺詩人達はローマに流入したユダヤ人の貧困や習慣を嘲笑したし、知識人も反ユダヤ主義を剥き出しにする。著者は明言していないが、ヨセフスの著作『アピオンへの反論』はこれらの反ユダヤ的中傷に答える形で記されており、今は原典が失われてしまったヘレニズム・ローマ時代の作家の文章が多数引用されている。その引用が部分的でかつ些かの恣意性が含まれているであろう事は否定出来ないが、当時のローマの知識人社会におけるユダヤ人理解の程度がよく窺えるという点にこの著作の重要性の一端が存する。

第九章では、71年にローマに移って後、残りの生涯を四つの大部の著作執筆に充てた歴史家としてのヨセフスの事蹟が述べられる。それらは全てギリシャ語の助手の助けを得つつ執筆され、彼の友人にしてパトロンであったエパフロディトゥスに献げられているが、このことはヨセフスの著作が、95年にエパフロディトゥスが皇帝ドミティアヌスの命令で自殺する以前に著されたことを傍証する。ここでヨセフスの外的生涯の足取りは消える。

まず紀元前後のユダヤの経済・社会・政治・文化史的営為を知る上で最も重要な資料である『ユダヤ戦記』はユダヤ人の新たな蜂起防止という政治的意図を以て著されたと著者は述べる。六万行に及ぶ『ユダヤ古代誌』はユダヤ人の歴史を前半は聖書に基づいた翻案の形で記し、後半は旧約聖書と新約聖書との約三百年間の出来事を、様々な歴史書を用いて記したものである。著者は取り立てて記してはいないが、前半はヘブライ語聖書との比較のみならず、七十人訳聖書や死海写本との比較研究が待たれる部分である。世界最古の自伝と見なされる彼の『自伝』の中で、ヨセフスはユダヤ人であるティベリアスのユストゥスがローマ側に阿って、ユダヤ人を不当に過小評価し貶める歴史書を著したのを知って怒り、またヨタパタ防衛の際の自分への中傷に対する反駁の意味で筆を執ったと述べているが、ユストゥスの著作は現存せず、またヨセフスも前件については結局弁明しておらず、さらに前述のように『自伝』と『ユダヤ戦記』との間に矛盾があるという点で、この著作の評価については著者は慎重な態度を取っている。

第十章では、ヨセフスの死後、彼の著作の辿った運命が述べられている。ヨセフスの著作は発表後ローマの図書館に納められたが、ラテン語著作家で彼の影響を受けていると思われる作家はいない。しかし二世紀以降キリスト教の教父達は自らの由緒の古さとエルサレム陥落の正当性、及びイスラエルの正統な後継者こそキリスト教徒であるという主張の根拠としてヨセフスを引用するようになる。またヨセフスの著作が中世に聖書と並ぶほどの権威を持ち、近代でも家庭の常備書だったという事実は、イエス・キリストへの言及だと考えられて来た通称「フラウィウス証言」のお陰であるが、現在この「フラウィウス証言」は後世の加筆だと見なされている。その他のヨセフスに関する後世の受容と理解の変遷の歴史は、ユダヤ教側の反応や近代ヨーロッパ文学作品への影響も含めて非常に興味深い。著者はその過程を簡潔に要領よく述べているが、それをさらに要約するのは無意味であろう。ただ近代に至り、ヨセフスの著作を通じてのヨセフスの人物像研究が関心の対象になるにつれて、ヨセフスは次第に多様な解釈を受けるようになった。前述の Saulcy や E. Schürer らはヨセフスに対して虚栄心と自惚れの強い裏切り者という評価を下し、シオニスト達はヨセフスに対して嫌悪感を抱くようになる。しかし著者は言う。「ヨセフスが英雄となるためには、何も書き残すことなく、ヨタパタで死なねばならなかった。しかし、もしそうであったなら、後世の人びとは永遠にその歴史について知ることはなかったであろう」と。

\* \* \*

本書は『フラウィウス・ヨセフス伝』と題してはいるが、単なる伝記ではない。人間は一人一人がみな、歴史的・社会的・文化的背景を背負い、意識的であると無意識的である

とに拘わらず、それらの束縛を受けながら生きている。著者はヨセフスという一人の人間を通して、彼の背後に広がっていたユダヤ世界とローマ世界を社会的・政治的・精神的など様々な局面を捕らえつつ描き出している。本書は最近の研究成果をよく踏まえながらも、難解に陥らず、紀元一世紀前後のローマ史及びユダヤ史、ユダヤ教とキリスト教、当時の政治や現代にもつながる人種問題に関心を持つ人に対して、更には西欧文学や絵画をより深く理解したいと思う人に対しても親切に答えてくれるだろう。

紀元一世紀前後という時代はローマにとっても、ユダヤにとっても大きな変動の時代であった。ローマにおいては前27年にオクタウィアヌスが帝位に就いて帝政が開始され、約一世紀にわたってユリウス・クラウディウス朝が続く。共和政末期に版図が拡大された結果、属州から運びこまれる産物と奴隷は、ローマ経済を豊かにすると共に、人々の生活様式にいくつかの変化をもたらした。打ち続く平和は人々の市民的精神の基盤を揺るがし、属州の各地からは様々な地方的思想や土着の宗教がローマ社会に流入して、人々の心に不安定な感情を巻き起こしていた。そのような宗教の一つにユダヤ教があった。ハスモン朝以降、ディアスポラの拡大に伴い、パリサイ派は布教運動・改宗運動に積極的に関わるようになり、ユダヤ生まれでなくとも正規の改宗者であればユダヤ人と呼ばれることが普通になったのがこの時代であった。ユダヤ本土においても、ローマ世界の拡大に伴う変化の波を免れることは出来なかった。ローマによる属州化とそれに伴う生活の変化、意識の変化は十分に考えられる。ユダヤ教内部でも、メシア運動、クムランのエッセネ派運動、洗礼者ヨハネのバプテスマ運動、イエスによるキリスト教の活動等活発な宗教運動が起こった時期であり、この時代は新しい宗教グループ誕生の揺籃期であった。そして最大の事件は70年のエルサレム陥落と神殿崩壊である。今まで神殿で行われていた供犠が不可能になったことは、ユダヤ人の生活と精神を根本から揺さぶった。そしてその揺さぶりへの応答として、所謂ラビ・ユダヤ教が生まれてくる、そのような変動の時代であった。その時代の生き証人がヨセフスなのである。

ここで一つ指摘しておきたいことがある。著者は余り重視していないようだが、ヨセフスの歴史叙述の背景にある思想はもう少し探求されてしかるべきではないだろうか。近年のヨセフス研究では、ヨセフスとストア派の関連が殊に指摘されている。それは文体上の類似という問題、例えば「神の摂理」が“*πρόνοια*”という単語で表され、占星学的ニュアンスの濃い「運命」(*εἰμαρμένη*)とは区別して用いられていること、ルカ福音書における“*πρόνοια*”との関係、という問題、或いは、ヨセフスがパリサイ派をストア派になぞらえて肯定的に説明しているという思想的問題であるが、それだけではない。著者は全然触れていないが、注目すべき事実がある。ヨセフスの友人であり、パトロンであり、後に皇帝ドミティアヌスの不興を買って自殺するエパフロディトゥスは、ストア派哲学者エ

ピクテートを奴隷として所有していた、という事実である。ヨセフスの友人のエパフロディトゥスとエピクテートの主人のエパフロディトゥスが同一人物であることは間違いないと見て差し支えない。当時のローマでは普通、奴隷は真面目に勤めていれば、二十代後半から三十代前半に主人の手で解放されて自由の身分にして貰うのが習わしであったし、エピクテートの生年を50年として(異説に60年)71年にローマに移ったヨセフスとは、直接に知り合う機会は無かったとしても、同じサークルに属していて、ヨセフスがストア思想に触れる機会は大いにあったと推測出来る。本書でこの事実の指摘が漏れていることは、画竜点睛を欠くの思いをさそう。

しかしこれよりさらに、ヨセフスの思想的背景を、ユダヤ的背景のみならず、ヘレニズム・ローマの知的伝統に溯って探求することを求めるのは本書の射程を越えているのであろうか。ヨセフスのテキスト研究は他の書物との比較研究が待たれる分野である。

本書は宗教学的議論や思想的議論、或いは最先端の宗教史学的・文献学的研究成果を求める人にとっては多少不満が残るかもしれない。しかし、ヨセフスという一人の人物の生涯を概観することを通して我々は、一世紀のユダヤ社会の全体像を把握することがある程度可能になる。しかも本書は古代史の一分野としての閉じられた研究ではなく、本書を通して現代もなお問われているユダヤの諸問題を考えさせるような著作である。古代社会と現代社会の共通点と相違点とを見いだす人もいるかもしれない。ユダヤ教の本質を考える人もいるかもしれない。しかし、何と言っても我々を強く魅了するのは、ヨセフスの生き方であろう。彼の生涯の評価は様々であろうが、戦争に負けた国のある一人の人間が、戦後をどのように生きたのかということを考えるとき、我々は何か肅然とした気持ちにならざるを得ないのではないだろうか。